

若者を育てる研修の講師をしてわかったこと(一)

ひきこもる(閉じる)若者が「心を開く対話術」

久繁哲之介
地域再生プランナー

父兄が子どものために講師に期待すること

当連載を始めた私に、自治体職員研修講師の依頼が非常に増えたことを前回(6月11日号)紹介しました。自治体職員研修以外にも、父兄と教師を対象としたPTA研修の講師、ひきこもり青少年とその父兄を対象とした青少年教育研修の講師依頼も多く頂くようになりました。以下、PTA研修と、ひきこもり青少年研修講師を合わせて「若者を育てる研修」と言います。

さて、私は若者を育てる研修の専門家ではありません。研修の依頼者に、私を選んでくれた理由を聞くと、次の3点のいずれか、あるいは複数を挙げてくれます。

- ・私が主宰する「若者バカ者まちづくりネットワーク」の活動から、若者の動向・気持ちを通してほしい
- ・拙著「地域再生の罫」から、地方で若者の雇

用(仕事)を創出する方策を話してほしい
・当連載10回目(2月20日号)から8回連続で論じた「地域密着の小規模な起業」について話してほしい

子どもを想う父兄の視点は深く広い

地方中小都市で、若者を育てる研修後に父兄と意見交換をすると、父兄から私への質問や要望は主に次の3種類に分類できます。

- (1) 地元の雇用は役所、信金など金融、零細企業の三つに限られる。この3カ所は、異なる「価値観、生き方」を許容しないから、子どもは就職しづらい(あるいは離職して、ひきこもっている)。そもそも地域の風土が、異なる「価値観、生き方」を許容しないから、若者は「働く場も、溜まり場」も見つけられない。この二つの場をつくる「まちづくり」のヒントを教えてください。
- (2) 若者の教育施策と雇用施策は緊密に連携すべ

き課題だが、自治体は各部署が「矛盾した、形骸化した」施策を行い、効果が出ない。若者の問題に限らず、地域の課題は「自治体の部署間連携」次第と思うが、これを自治体に気づいてもらい、改善してもらうには、どうしたらよいのか。

(3) 地元自治体の雇用施策は相変わらず、補助金を使って工場や大型店の誘致ばかりしている。今、どう考えても企業が日本の地方に進出する余裕はない。万が一、誘致できても工場や大型店の雇用は非正規に限られるし、業績が少し悪くなると撤退してしまう。事実、この地域でも最近、ある工場が撤退した。だから親も子どもも、とりあえず学校卒業後は大都市で働くことを考えている。でも、大都市の雇用も先行き不透明だし、いずれは地元に戻ってほしい。そのときに備え、地方での起業や仕事創出はどうすべきか。それをヒントに、自治体の無駄な工場誘致補助金をやめさせて、新たな起業や仕事の創出に努力するよう提案したい。

前記の意見・要望から地方自治課題の本質は、次のように集約できます。

- ・ 青少年が「ひきこもる、働けない」理由となる「異なる価値観を認めない、多様な生き方（働き方）ができない」地方中小都市の風土、雇用環境
- ・ 自治体の各部署が「矛盾した、形骸化した」施策を行う「自治体部署間の連携欠如」
- ・ 工場と店舗の誘致しかできない自治体の雇用施策

こうした父兄の思考と着眼点は、非常に深く広く、的確だと感じます。前記の3点について、今回は1を、次回は2を考察します。3は8月ごろに「地方都市の再生を市民目線から考える」連載で取り上げる予定です。

異なる「価値観、生き方」を認める

ひきこもりは主に「職場（学校）、住む場」の変化が引き起こします。だから、ひきこもり青少年は地方中小都市に限らず、大都市にもいます。しかし、大都市の場合は生き方や進路の選択肢が多く、時間をかけて「新たな自分に合う居場所」を本人と関係者が探すことで、ひきこもりを解消できる可能性が高い。すなわち、異なる「価値観、生き方」を許容する風土、多様な選択肢が「ひきこもり解消」に結び付きます。

しかし、地方中小都市には、異なる「価値観、生き方」を許容する多様性が乏しい。だから、一度ひきこもってしまうと「ひきこもり解消」が非常に難しい。つまり「多様性の欠乏」が、ひきこもりの発生・長期化の要因になります。

事実、大都市の若者や主婦が家庭の都合で地方中小都市へ転居すると、ひきこもりになりやすい傾向が見られます。私は地方中小都市で、ひきこもり青少年研修を実施後、ひきこもり青少年たちと交流するのですが、親の仕事の都合による大都市からの転居組が非常に多い。彼らは「元の居場所（大都市）に戻りたいが、親元からも離れたくない」と言います。

この「Aしたいが、Bしたくない」表現を、ひきこもり青少年は非常に多く使います。ここで「甘えている」と責めないで、「したくない」不安を和らげる対応をしてあげたいものです。

人の存在・繋がり、居場所

前記のエピソードは、地方中小都市の「多様性の欠乏」が、ひきこもりの発生・長期化を生むと同時に、若者が地元を捨てて大都市へ行く理由であることも示唆します。地方の若者は進学（就職）時に、大都市へ行くこと、地元（親元）に残ることを天秤（てんびん）にかけます。このとき「地元に残る不安・リスク」を和らげることができない「人の存在・繋がり、居場所」等が、今の地方中小都市には欠けています。これが欠ける地方中小都市ほど、

若者の大都市流出が加速しています。

私は、ひきこもり青少年研修講師の経験から、地方中小都市の再生は、若者が地元に残る不安・リスクを和らげる「人の存在・繋がり、居場所」を創ることが最も重要であると感じています。

そこで私は、父兄と教師を対象としたPTA研修で講師を依頼されると、若者に関与できる「人の存在・繋がり、居場所」を講演テーマにすることが多い。某都市の講演で当テーマを主張する折次のエピソードを話したところ、（自画自賛で恐縮ですが）好評を博しました。

公立中学校での部活動指導経験

私は某公立中学校硬式庭球（テニス）部の部活動を指導したことがあります。夏休み中の1週間、9時から13時ごろまでという短い時間ですが、猛暑という条件下で多く長くとった休憩時間に、中学生の本音と実態を垣間見ることができました。また、男子部と女子部の双方を指導したことで、性別差も把握できたと思います。そして、この中学校の教員から中学生の学力など能力を育成する課題と方法論を聞く機会も得ました。

この中学校では、夏休みに「寺子屋」と称して、読み書き計算に問題のある生徒を1週間かけて集中指導しています。この間、教員の多くは寺子屋に駆り出されるため部活動を指導できません。そこで、区民テニス大会で準優勝経験のある私が、面識のあるテニス部顧問の教師から1週間テニス

部の指導をしてほしいと頼まれたわけです。

私がこの教師と会話してまず興味を持ったことは、寺子屋の対象生徒となる「読み書き計算に問題のある水準」です。寺子屋で中学2年生に課せられた「読み書き」の課題は、学年別漢字配当表の漢字を小学1年生分から中学2年生分までの全てを繰り返し書かせることでした。

私が教師に「中学2年生に小学1年生の漢字を書かせる課題は、いくらなんでもレベルが低過ぎて、反発する生徒が出るのでは？」と問うと、次のような話をしてくれました。

公立中学校は今

小学校低学年の読み書きができる生徒にはもちろん、そんな課題は出しません。寺子屋はそれができない生徒を対象に開講します。つまり「小学校低学年レベルの読み書き計算ができない」生徒への基礎指導が寺子屋の趣旨です。

今の子どもたちは、携帯電話（インターネット）に依存し過ぎて、漢字は書けなくても「選択」できればよいと思っているようです。いや、少しでも難しいと感じる漢字は「絵文字」で代替されています。

書き手（自分）が難しいとは感じない「平易」な漢字も、読み手から「漢字ばかりのメールで堅苦しい」の一言で、漢字を使うレベル・頻度はどんどん衰退していきます。現代の「漢字を書かない（絵文字を好む）中学生」には、何を書かせる

か以前に、書く行為そのものが必要で、それを習慣づけたと思うのです。

なぜ若者は携帯に即レスするのか？

部活動が始まって私が一番驚いたことは、休憩時間をとると、女子部員の多くが走って鞆に駆け寄り、鞆から携帯電話を取り出し、受信したメールや留守録への返信に追われている姿でした。

休憩時間が終わり、コーチ役の私が集合の合図をしても毎回、数人の女子生徒が携帯電話の返信作業に追われていて集まりません。

私は女子生徒に「部活動は1、2時間後に終わるから、そんなこと（受信したメールや留守録への返信）は後にすれば？ 今あなたたちは集合時間を守ることに集中することが求められているんだよ」と話し掛けて、返信作業に追われる理由を聞いてみます。女子生徒いわく「即レス（すぐに返信）」する理由はおおむね次の通りです。

彼ら中学生の会話は、たいてい「今なにしているの？」から始まります。発信者とすれば「もし相手が暇なら数時間後に遊ぼうと誘ってみよう」という感じで気軽に発したはず。しかし、この短い言葉は受信者の思考と行動を強く束縛します。なぜなら「今なにしている？」と問われたら「今の状態をすぐ返信」しないと、相手の期待に答えられないと彼ら若者は恐怖感を抱いているようです。彼らはその期待（すぐに返信する義務）を裏

切ると、仲間から疎外（いわゆる仲間外れ）されるかもしれないリスク（恐怖感）さえ感じているようです。だから、目の前のやるべきことは後回しにしても、発信者にとっては軽い短い一言への返信作業を最優先しているのです。

中断されて復活するのに大人で21秒

彼ら若者がどこにいても、彼らの携帯電話は数分おきにメールや通話を自動的に受信します。着信のたび、勉強や部活など今集中して取り組んでいる大切なことを中断して、すぐに返信します。

彼ら若者は、こうした何気ないメールや通話を楽しいと言います。しかし、楽しんでやっているようで、実は互いが互いの集中すべきこと・時間を奪い合っているのです。

これでは携帯電話を手放さない限り、勉強など集中すべきことを10分も持続できず、教師が期待する「漢字を書く習慣」はおろか、考える習慣さえ身につかないと思います。

某一流企業が社員の仕事ぶりをエスノグラフィ（行動観察）した結果、電話や上司呼び出し等で、仕事が一度和ぎれて、仕事を再開して「元の状態に復活するのに21秒（平均値）かかる」ということです。中断の頻度は数分に1回で、これでは仕事にならないと「集中時間帯、集中部屋」を設ける業務改革に着手しました。

集中時間帯とは、電話・話し掛け・メールを禁止する時間帯をつくることです。この時間帯、外

部からの電話は全てセクレタリーが「当事者は今、外出中と告げて（居留守にして）」対応します。

集中部屋とは、集中時間帯以外に集中したい社員用の部屋を確保することです。わかりやすく言えば「集中時間帯、集中部屋」とは、オフィスに図書館のように静かで集中できる場所・時間帯をつくることです。この両制度は非常に好評で現在、一流企業にかなり普及しています。

両制度の普及は、次のことを示唆しています。上司は部下を呼び付けたり指導したりする場合、人（部下）の仕事・思考を中断する弊害をもっと認識したマネジメントが求められています。

さて、21秒という時間は、能力も意欲も高い一流企業に勤務する大人の場合です。21秒でも一流企業は、仕事の支障が大きいと判断して、集中時間帯や集中部屋を設けています。読者も、よく仕事を中断されて、お悩みのことと察しますが、復活するのにどれくらい時間がかかっていますか？

中学生であれば、3倍の1分ほどかかると思えます。いや、勉強意欲と自己管理能力に乏しい中学生なら、携帯電話への着信やメールで2、3回中断されたら、もう復活する気持ちにはなれなくて、テレビでも見よう！と勉強をやめてしまうかもしれません。

親は子どもへ積極的に介入すべし

私が恐れるのは、この事実を子ども自身が認知

していないばかりか、安易に携帯電話を子どもに所有させてしまう親も認知していないことです。

携帯電話がない時代、子どもが在宅中に「外部世界と繋がるには親が介在」できました。外部世界と容易に接続できない子どもは、いやが応でも「集中できる時間が確保」され、子どもは勉強なり読書なりをしていたものです。

私が指導した部員の携帯電話所有率は（私が見たところ）男子は約半数、女子は全員でした。携帯電話を所有していない男子部員に非所有の理由を尋ねてみました。彼らは携帯電話の所有を切望していますが、親が私と同じ持論のようで、大学入学までは許可しないと言うそうです。

そういう環境にいる携帯電話非所有の男子部員たちは、いや応なく昔の中学生らしい日々を過ごしていると話してくれます。例えば、部活動休憩時間には「目の前にいる友人と無邪気に会話」しています。友人と遊ぶ約束するのも休憩時間に

「目の前にいる友人に直接話しかけて」行きます。携帯電話非所有組（男子生徒）の休憩時間光景は、同じ趣味を持つ友達との交流に見えます。一方、携帯電話所有組（女子生徒）は、同じ趣味（テニス）を持つ「友達が目の前にいる」にもかかわらず、携帯電話の返信作業に没頭しています。

携帯電話非所有組（男子生徒）の交流光景は、昔の感覚では至極当然のことです。しかし、携帯電話所有組（女子生徒）のそれと見比べてしまうと、実に爽やかで楽しそうに見えます。

両者のコントラストを見ると、このままでは未成年時代を携帯電話所有者として過ごしたか、非所有者として過ごしたかによって、日本人は全く異なる価値観・感性を持つ層に二分されていく不安に駆られます。

携帯電話でお互いの時間を無意識に奪い合い、「目の前の対象に関心を持たない（集中できない）中学生」に、私たち大人（父兄、教師）は、どう関与すべきでしょうか。これは「人の存在・繋がり」を考える好例です。

彼らを携帯電話から解放してやって、その生活がいかに楽しいかを示してやって、そういう生活を共に創り出す関与の方法を考えてみましょう。

通話より対話、バーチャルよりリアル

具体的な方法は、既に二つほど紹介しているの
で、「子どもと対話して」から応用・変形して実践してみてください。

第1案は、大学入学まで携帯電話所有を許可しないことです。第2案として、所有させる場合は集中時間帯を毎日設定する取り決めをするとういでしょう。

新たに提案したい第3案は「通話やメールより、対話」を重視することです。換言すれば「バーチャルな相手（携帯電話で繋がる相手）より、リアルな相手（目の前にいる相手）の存在を想う心」を育むことです。

なぜ公共交通機関の車内マナーは「携帯電話

の) 通話は禁止」なのに「車内にいる仲間との対話は禁止していない」のでしょうか? その理由を考えてみましょう。

音量の大きさが判断すれば、遠慮がちに話す通話より、つい盛り上がり過ぎて笑い声が交じる対話の方が大きい(うるさい)場合が圧倒的に多い。それでも公共交通機関が「通話は禁止、対話はOK」という理由は、音量の大きさにないことは明らかです。

対話は開放的、コミュニティを生む

理由は「目の前(周囲)にいる人の存在を想う心」を、乗客や交通機関が重視していることにあります。

具体的に言えば、車内にいる仲間との対話は「周囲の他人も理解できて、参加できるコミュニティ性」があります。なぜなら、対話の内容は対話者の発言から表情まで全ての情報が、周囲の他人に伝わります。

したがって、周囲の他人は対話のストーリーを理解できるし、内容によっては楽しむこともできます。また、少し勇気を出して、見知らぬ他人の対話に参加することもできます。

よく東京の電車内で、次のような光景に遭遇します。

小さな子どもがぐずりてそれを母親が叱ると、見知らぬ高齢女性がぐずる子どもに優しく話し掛け、対話はどちらかが下車するまで続きます。見

知らぬ母子と対話する高齢女性の表情を見てみると、本当に楽しそうな顔をしています。

こういう光景を見る私の心まで楽しくなっています。そう、対話は開放的だから、コミュニティが育まれるし、他人の心に好影響を与える力があります。ぐずる子どもにしても、見知らぬ他人に優しく話し掛けられて何かを感じ取っているはずです。こういう「他人の関与は、子どもの成長に欠かせない」ものだと思っております。

通話は閉鎖的、ひきこもりに繋がる

かたや、車内の通話は「周囲の他人は理解できないし、参加もできない閉鎖的」なものです。周囲の大勢の他人は「携帯電話で繋がる相手の発言表情」は全く分かりません。だから、目の前にいる片方だけの声は、どんなに小声であっても「うるさい雑音にしか聞こえない」のです。

車内の「対話と通話の構図」は、携帯電話に依存する子どもと家庭・学校との関係にも当てはまります。

子どもが目の前にいても、携帯電話で通話・メールされると「親・教師は理解できないし、参加もできない閉鎖的」な関係になります。すなわち、親・教師が子どもに全く関与できなくなります。

ここで、私が中学校テニス部の部活動指導をした話を振り返りましょう。私は、携帯電話非所有組の男子生徒たちが「私の目の前で交わす対話」は内容を理解できて、参加(助言)もできました。

一方、携帯電話所有組の女子生徒たちの「携帯電話で繋がる通話(メール)」の内容は全く理解できません。それでも私は、彼女たちの通話(メール)に参加(助言)する道を探りました。つまり「部活動は1、2時間後に終わるから、そんなこと(受信したメールや留守録への返信)は後にすれば? 今あなたたちは集合時間を守ること、テニスに集中することが求められているんだよ」と話し掛けたわけです。

こう言われたら彼女たちは、返信作業をやめるか、やめられない理由を、教師に準じる部活動指導者の私に話すか選択せざるを得ません。彼女たちは、後者を選んでくれました。

このように、親や教師は、子どもの意思を尊重しつつ「子どもに選択肢がある問い掛け、語り掛け」で子どもに関与できれば「見えない閉鎖的な通話を、見える開放的な対話」に変換することができます。

もし、この場面で私が頭ごなしに「集合時間を守れ、返信作業は後にしろ」と上から目線で命令していたら、彼女たちとの対話は実現していないはずです。読者の皆さん、これは「部下マネジメント」にも共通する重要な視点です。

ひきこもる(閉じる)子どもが期待すること

新幹線の車内販売で、販売員平均の5倍を売るカリスマアテナンドットの茂木久美子さんは著書「買わねぐていいんだ。」で、車内販売にまつわ

る次のエピソードを紹介しています。

新幹線デッキにある車内販売準備室で商品を補充する茂木さんを目当てに2回も、ある幼稚園男児がやってきました。1回目は男の子が車内で折った折り紙を茂木さんにプレゼントして、少しだけ話をしたそうです。2回目、男の子は茂木さんに「深刻な身の上話」を語り始めます。恐らく、1回目の対応で、茂木さんなら自分を受けとめてくれると幼児ながらに感じとったのでしょう。

その男の子は、幼稚園で「いじめ(暴力)」を受けている。こと、親が離婚していて今日は久しぶりに東京にいる父に会いに行つたことを茂木さんに話しました。茂木さんは、涙をボロボロ流しながら、しばし男の子を強くハグし続けました。男の子が座席にいるとき、隣席の母親が寝ていることに、茂木さんは複雑な気持ちになったと述懐しています。

さて、茂木さんが職場で男の子をハグする行為は業務マニユアル的には違反しているかもしれませんが。そして、この時の茂木さんは「会社の体裁とか売り上げ」なんか全く考えていません。組織人としては、不都合な側面があるのかもしれない。しかし、こうした「感情のある個人の愛や行動」が、人のオーラとなり、困つた(閉じた)人を強烈に惹き付けるのでしょうか。

ひきこもる直前のSOSサイン

最後に、「ひきこもり青少年研修」の講師を経

験してわかつたことを整理します。

ひきこもりは、主に「職場(学校)、住む場」の変化が引き起こすと先述しました。ひきこもる(閉じる)青少年は、ひきこもる過程で「自分をわかってくれそう、受け止めてくれそうな包容力ある大人を厳選して、必死でSOSのサイン」を発信し続けます。このSOSサインを受け止めてもらえないと「ひきこもり(閉じる)青少年」が生まれてしまいます。一度、ひきこもつた(閉じた)青少年が「公の場に出る(心を開く)」のは非常に難しい。

事実、全国にはさまざまな「ひきこもり青少年研修」がありますが、参加者は「親や教師を含む支援者」ばかりです。当事者(ひきこもり青少年)は参加しないのが実情であり、これが最大の課題なのかもしれません。

そんな中、私が講師をする「ひきこもり青少年研修」には毎回、数人の当事者(ひきこもり青少年)が参加してくれまます。主催者いわく、当事者が(誘い合つて)数人も集まる「ひきこもり青少年研修」は非常に珍しいそうです。

時には、ひきこもり青少年研修に参加してくれた「ひきこもり青少年たち」が講演後に、私と飲みに行きたいと誘ってくれます。彼らと会話するたびに私は、次のことを痛感します。

ひきこもり青少年が心から欲していることは「立派な先生の机上の建前理論の講義」ではなく「自分を受け止めてくれそうな目の前にいる包容

力のある大人」の存在・繋がりです。

立派な先生を講師に招いた「ひきこもり青少年研修」の参加者が「親や教師を含む支援者」ばかりで、当事者(ひきこもり青少年)は参加しない一番の理由がここにあります。

私は、「ひきこもり青少年研修」の講師を引き受けるようになってから、専門書や関連書籍を読みあさりました。私の心に刺さつた唯一の書籍は(専門書ではない)茂木さんの「買わねぐていいんだ。」です。

本書のエピソードの「幼稚園でいじめられる男児」にしても、私の研修に参加してくれる「ひきこもり青少年たち」にしても、自分を受け止めてくれそうな大人を見極める力が非常に強い。

「ひきこもり青少年研修」で私は、立派な理論は何も話していません。でも、ひきこもり青少年は私の話を聞くために会場のある繁華街に「家から出て来て」くれて、飲みに行きたいと積極的に誘ってくれる場合もあります。

こんなときに私は、ひきこもり青少年と楽しく飲食した後の別れ際に、青少年たちと固い握手、あるいは軽いハグを通して、私の彼らを応援する気持ちを伝えるようにしています。

◆ザ・キング・オブ・フルーツの自叙伝◆
黄金のフルーツをもつ男
ジェームズ・ゴールウェイ & リンダ・ブリッジズ
名演奏家シリーズ(11) 高月園子訳
●四六判・336頁
●定価 2625円
威風堂々の金のフルーツで人々を魅了する男の自叙伝。
時事通信社